

Conférence de Martin RUEFF
(Poète / Professeur de l'Université Genève)
Y a-t-il des images poétiques?

マルタン・リュエフ講演会 (詩人・ジュネーヴ大学教授)
「詩的なイメージは存在するか？」

日時：2020年1月24日 (金) 17:00～
会場：早稲田大学戸山キャンパス 32号館1階128教室

司会：橋本一徑 (早稲田大学教授)
ディスカッサント：小野正嗣 (早稲田大学教授)

主催：早稲田大学総合人文科学研究センター「イメージ文化史」部門
科学研究費基盤研究B「近代国家の文化的アイデンティティ形成における古代表象の諸相」(研究代表者 玉田敦子：中部大学)

2020年1月24日(金)17時より、詩人でジュネーヴ大学教授のマルタン・リュエフ氏による講演会「詩的なイメージは存在するか？」が、「イメージ文化史」研究部門の主催で開催された。逐次通訳を司会の橋本一徑教授が担当されたほか、ディスカッサントの小野正嗣教授も交え、ときに対話のような形式をとりつつ講演がおこなわれた。

リュエフ氏は「詩的」と「イメージ」という2つの語について、その多義性のために論じることが困難であることから説きはじめ、日本では「風立ちぬ」で知られるポール・ヴァレリーの詩「海辺の墓地」の第1行にあらわれる鳩と屋根のイメージ(それぞれ船と海のメタファーになっている)や、仏訳の万葉集から蓮を詠んだ長歌を引用して、フランス語と日本語それぞれの詩における「イメージ」の扱いについて論じられた。さらに「自然のイメージ」と「人工のイメージ」とを対比しつつ、詩とイメージをめぐる西洋での2つの命題として、ホラティウスの「詩は絵画のように」とアリストテレスのメタファー論を取り上げ、後者に重点を置きながら、詩的言語がメタファーを通じて動的なイメージを生み出し、特に「自然のイメージ」によって時間性がもたらされることに着目して論を展開した。このように詩的イメージは、固定されたイメージから抜け出し、時間性を喚起するものであることが結論付けたうえで、リュエフ氏はさらに、言語と知覚について、および日本の詩とフランスの詩の比較について、という2つの問題を提起した。

これに対し小野教授が現代社会にあふれるイメージと政治との関係を問うたのははじめ、小沼純一教授からは聴覚的イメージと詩の関係について、さらにアポリネールやマラルメの詩におけるイメージなどについて会場からも活発な発言が寄せられた。



(リュエフ氏による講演)



(小野・橋本両教授をまじえたディスカッション)



(リュエフ氏に質問する小沼教授)

報告・写真：吉田隼人（総合人文科学研究センター助手）